佐橋五湖作

賣炭翁青馬曳綱

鹽原多助一代記

版權所有
興行權

088713-000-3

特52-586

売炭翁青馬曳綱

-塩原多助一代記-

佐橋　五湖/著

M25

DBJ-0372

○第貳幕目

○下新田角右衛門内の場

○塩原多助婚禮の場

一塩原多助

一道連の小平

一若者五人

一塩原太左衛門

一塩原角右衛門

一塩原娘お柴

一後妻おかめ

一伝屋やかく

一門女ろく

○第三幕目

○塩原奥座敷の場

○庚申塚馬別レの場

一塩原多助

一友達圓次郎

一原丹次

一同忰丹次郎

一若者五八

一伯父太左衛門

一後妻おかめ

一同娘お柴

一下女お六

一馬壹頭

○第四幕目
○盥原馬小屋の場
○同家奥座敷の場
一原　丹　次
一同　悴　丹三郎
一伯父太左衛門
一名主惣左衛門
一百性作左衛門
一若イ者五　八
一百性　又次郎
一後妻　おかめ
一娘　お　染
一下女　お　六
一百性　大　勢
一馬一疋　壹　頭

○第五幕目
○横堀村草庵の場
○同　深山殺しの場
一道連の小　平
一編立の仁　助
一原　丹三郎
一柚　斧　六
一尼　妙　岳
實ハ又旅おかく
一丹三郎妻お染
一旅　人三　人
一獵師　貳　人

○第六幕目
○戸田家通用門の場
○盥原長家住居の場
一盥原角右衛門
一盥原　多　助
一仲間　甚　平
一鎌田市　作
一門　番三九郎
一同　五左衛門
一酒屋ゟ用新吉
一八百屋七右衛門
一盥原妻　おせい
一仲間　三　人
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○第七幕目
○相生町炭店の場
○本所一ッ目橋の場
一藤野屋杢左衛門
一盥原　多　助
一岩田屋久　八
一差配人金兵衛
一朝間の千　吉
一佃の與　吉
一蕎麥屋十　六
一妓　夫玄　庵
一夜鷹のおその
一同　およし
一炭買　大　勢

○第八幕目の局
○本所四ッ目の場
○櫻馬場仇討の場

一鹽原多助
一運運の小平
一藤野屋李左衛門
一岩田屋久八
一非人の勘太
一女房お榮
一藤野屋娘お花
一茶店の婆ゝお辰
一女非人のお傳
一仲間甚平
一非人のあら熊

本舞臺三間の間道具の貳重上手障子家体正面納戸口此上の方壹間の押入浩田御用と印たる提灯箱をかけ下手太とき縄暖簾をゝけ臺所口を見せ有る都て沼田下新田農家鹽原角左衛門内の体在郷歌にて幕明く

(お六)モシ五八さん〳〵大旦那のお供で江戸見物をして恨らやましいねへ私しも一度往て見とうゞんすよ(五八)イヤ〳〵江戸あんぞへ行ものじやないおらも旦那も江戸へ往つた晩ゝら火事ゝ追れて内のお榮さんを拾ッて歸つて來たのだ(れ六)ヲヤまアそんなよ火事の有る所ゝいなア(五六)今お榮さんと若旦那の多助さんと二人りでどこへ行なすつたのじや(お六)あれゝね大旦那が大變よわるいので八幡樣(二人りして日參でムひ升よ(五八)それゝ早孝行な事だのふと是を歌よ成り向ふより塩原多助娘お榮の兩人出て來り(ゑい)モシ多助さまへあなたお守りを持つてムんすゝへ(多介)アイ多助をつゝり持ッて居り升と云ながら本舞臺へ來ると跡より道運の小平仇屋のおかくゝ見得隱れゝ付て來る二人りゝ是を去らぬ内へと入り(多介)ハイ只今歸り升た(五八)ヲヤ若旦那お歸りなさい(お六)お二人りさん大ろふお早ふムり升た(ゑい)おとつさまのさし込みゝなゝつたゝへ(五八)ハイあなた方のゝ信心のおかげかして今日ゝ常のやうてムり升(多介)ろれゝろふと此ゝ札をおとつさんよおいたゝかしゝて直よ祭つて置き升ふ(ゑい)さやふいたし升ふ(ゑい)あアト歌よ成り多介お榮ゝ納戸の内へと入ると此時門口よ伺ひいたる小平ゝ内へと入り(小平)ハイゝめんなさい(五八)ハイど

こから來さまた(小平)盥原角右衛門ハこちらでムひ升ゥ(五八)ヘィ爰でございやすゲおめへさんハどちらから來さまたナ(小平)何私しハ江戸の者でムひ升が今爰の内へ二人り連でハ入りなすつた若ひのハこちらのでムひ升か(五八)ハイおらァ内の息子さんとお藥さんといふ娘さんだ(小平)ヘイそふですかと云乍門口を明けてヲイおつかァこつちへと入りおせへ(かく)ハイ此免おさいましと内へと入るを二人りハ是を見て(お六)ヲャ〳〵お婆さんがと入ッて來たよ(かく)モシそこよいなさる芋助さんどふゥ角右衛門さんといふお方よお目よ掛り度もんだねへ(五八)おらァ旦那ハ大病で中〳〵人よあふ事ハ出來ないのだ(かく)それじやァ若旦那おお目よ掛り升ふ(お六)それでハ若旦那を呼で來升ふとお六奥へと入ると以前の盥原多助出て來ゥ(多助)私しよあい度とハどなたでムり升(五六)多助さんあんたよあい度といふ人ゲシレ爰よいる二人りの人違でムひ升(多介)ヲ、そふゥ○是ハとなたゥ存升ぬがあいよく親父ゲ病氣でムり升て失禮をいたし升るンテ私しの此用が承り度ふムり升る(かく)それじやァあおたゲ此子息さんでムひ升か只今あなたといつ所よ爰の内へと入り升た娘ハこちらの娘此だと聞升たゲいつたいあの娘ハどちらからお貰らいおさい升たゥそれを承り度ふムひ升(多介)ハイあの娘ハ貰らつた譯でハムひませんあれハ内の娘でムひ升(かく)モシおとぼけなすつちやァいけませんあれハ此たしの娘だよ○私しや三田の三角で仇屋といふ引手茶屋のおゥくといふ者あれハ私しの大事な金箱娘此二月大火事の時深川を焼出されゆゲ出す途中てはぐれてまいけムが日まで行衛が知れないゥらだん〳〵手分けをしてさゲしたら沼田のこれ〳〵の所へいつたと聞たお仍て悴を連れて出て來升たゲ離れお沙汰をしておまへ所の娘よまなすつたゥそれを承り度のです(多介)どふいふ譯ゥまり升ぬゲ親父ハ大病でムひ升ゥら親共の病氣の少し治るまでの所をお待なすつて下さいまし(かく)イヤまたれません一日いくらといふ高ひ宿ちんを拂つて待つていられ升ものゥね(小平)沼田の宿屋斗りでも安くねへはらいだ(多介)沼田の何ヒヲ宿屋へお泊りおなつており升ゥ親父の病氣の治り次第よお迎ひを出し升る(かく)イヤいけませんに病氣なら旦那のお居間まで案内して下さい私しの娘を連れて來てこちらの娘もねへものだちいさい中ゥらおかいこくるみで育た娘だ何で此まゝ歸る物ゥにめんなさいとふゥくハ二重へ上り掛るを五八ハ留て(五八)ヲイ〳〵上つちやァだめだ名主へ此事をゥふいつて來るがよふがんすゥ(かく)へ、どこへでもいつてお行よゥちらゲ往ゥなくつてもかどもゥしで願ひ付るのだ(五八)何だゥどもかしだよくそんな事をぬゥすおサ名主へつれて行のだと五八ハ立腹るを小平ハ是を見て(小平)ヤイ〳〵芋助めおれのお袋をどふするのだもるくふざけやゲると爰の内へ火を付るゥらそふ思へ(五八)たまげた火を付けられてたまんねへサ名主へ來やァがれと小平にかゝるを小平ハ五八を投る(五八)ア、いたい〳〵(多介)こりやおまへさん方ハもたし所へろうせきをなさるのゥ(小平)ろうせきとハ何の事だ人の大事な娘をかどもゥしてろうぜきとい

何の事だ(かく)サァ小平や奥へ往ッて病人あわつてとおしを付ケやふと立懸るを此時奥お
て拙原の別家太左衛門聲うけて(太左)イヤお出にハ及び升ぬ主角右衛門それ〳〵出升てはあ
いさついたし升ふと太左衛門出て來る(多介)ヲ、あなたハ伯父さん(五八)太左衛門旦那(か
く)それじやああたハ角右衛門さんでおく(太左)ハイ拙原の別家太左衛門とヤ升るが主じよ
うもッて一ト通り承もつた上ではあいさつを致しやすゞいつ体まァああた方ハどちらのお
方でムり升お(かく)私ハ江戸の三田の三角で仇屋といふ引手茶屋の主でおかくといふ婆〳〵
でムひ升此間深川の火事で娘をお内の旦那よりどもうされたので出て來升たゞいつたいま
ア誰れよ沙汰をおすつてこちらの娘だとお答へなすつたのだろうれを承り度ふムひ升(太
左)イヤはて尤でムりやすそのおはなしとヤのハかやふでムり升る○主角右衛門が江戸へ參
り升た時アノ大火とやらでムり升た(五八)大旦那も此五八もうろ〳〵している時お竹藏と
うのどぶの中へお藥さんが身を投げて死のふといふ所を旦那が助けて連れて歸り升たよ(
太左)どこを尋るあもあの燒原殊よ親類もないとの事も(多介)是非のふ親父さんゞ連れて
戻り委しい咄しを聞ハ親兄弟もあいとの事も〳〵私しの妹分よして置ふより仕やふゞね〳〵じ
やムりませんか(うく)モシ〳〵とぼけちやアいけません何だと〳〵親兄弟がね〳〵ら妹よ去
たとおいひだがそれゞ立派なお百性さんのはあいさつう田地の三百石も有る豪家の詞うい
くら燒原でも町内よ自身番も有れハ名主も有る事だ(小平)なぜよく糺して連れて歸らねへ

のだまたあまつちよも此ち袋や兄さんゞ知れね〳〵といつてよくすふ〳〵しく爰の娘よあつ
ていやアゞるのだこりや人の娘を一ト晩でもとめて見りやアきずを付ケたとしか思はれま
せん一旦疵ものよされたうらいだまつて連れて歸〳〵られね〳〵ま〳〵(多介)歸〳〵られぬとあれ
ハ私しの方へお貰らいヤ升ふ(かく)貰ふなら貰ふやふふあ咄しのきまりを付ケなさい只ハ上
ケられません三百兩お呉んなさい(多介)おぜ三百兩の金を出すのでゞんすな(かく)なぜとい
つて十九までそだてた身の代ろ金か出さおけりやアお藥を歸して下さい女郎よてもたゝき
賣て去ます(太左)夫れハ誠お濟まねへゞ全体アノ娘ハおまへの娘よ違ひないのうな(か
く)私しの娘だうら娘といふのだ(太左)それがさあの娘ハ七ッの時保泉村の原中でうどもう
されたお藥といふあの娘(うく)ヱイとぎつくりする(太左)どうしてそれをおまへの娘ふ去な
すつた(かく)どふもけしからぬ事をおいひあさるがあれハ私しの娘よ違ひないまたかど
わか去た抹といふ事ハ知りません(太左)おまゑさんとぼけたつてむだいよ○おかめさん爰
へ來て一寸此人達ふお目よ懸りおさいと此時奥より後妻おかめ娘お藥の兩人出て(お龜)モ
シおかゝくさんおまへ忘れハなさんすまい十三年跡鴻の巣の驛で馴染よ成り保泉の原中で此
お藥をかどもうし十三年ゞろの間まふも娘ふして居なすつたな(うく)ヲヤまァおうみさん
ゞふるまァ○思ひゞけない所でお目よ懸り升たいつたいどうした譯でおまへさんが爰の内
ふいあさるのだ(太左)サ是よいいろ〳〵譯有つて今ていハ主角右衛門殿の女房サ(龜)本に腹の

立つおうく殿よふも〳〵人の娘をうゞ巳うして娘ゐしていたのじやなと立腹思入有るを多介い是をあだめて(多介)扱おうくさんとやら勘うして實親ゞ知れたら元ト〳〵ゐ返しなさるて有ふね〳〵(うく)返すたつてどうもたゝい返〳〵されません路金を遣ッて巳ざ〳〵出て來たんてすうら(太左)ろふさね〳〵私もゞ扱ひで五兩上げ升うらゞらじ錢だと思つていさくさなしよ歸りなさいと五兩の金を出すと小平い受取り(小平)へイ有難ふムひ升サお袋歸ろうゝ(うく)仕かたがねへ歸ろう〳〵是いどなたもおやうまきうムり升たエ、いま〳〵しい事だのふと歌ゐて二人りい向ふへと入ろ(五八)とふ〳〵歸つて行きやアゞつた(龜)本とふよ惡ひやつてムり升ゐアと(太左)十分よかけ合つてやつたのだゞ併しお榮やおまへも是でやつゝいを拂ッたのだのふ(お榮)私しやどふ成る事かと思ひ升ておつゝさんのゝげへかくれてゐり升たひいなアと此時奥よりお六出て(お六)モシ皆さん大旦那ゞ早く來ひと呼てムひ升(太左)ヲ、そふかそれでい此咄しを角右衛門殿よ安心爲よ聞かし升ふ多介おうめ殿奥へ行升ふ三人を先きよお六五八も付て奥へと入ると跡此道具ぶん廻ひす

本舞臺正面壹間の床の間附の平舞臺上下共折廻り障子家体右平舞臺の眞中よ六枚の屏風を引き廻し爰よ擂原角右衛門病氣の体よて滿團よ寄りかゝりいる此左右よ以前の太左衛門お龜多助お榮何れも介抱している相方ゐて此道具納る

(角右)太左衛門い來ているか(太左)ハイ是よおりやす(角右)ヲそこよいるかコレ太左衛門おれが血筋といふいろあたより外よいないぞよ(太左)サろれだからおまへを便りよ思つておりやすどふり早く本腹してくんさい(角右)イヤ〳〵迚も此度いだめだ皆を爰へ呼だい外じやあいゞ此多助い此擂原の内の相續人なれゞおらの息さの有る内よお榮と多助と祝言の盃をさせて呉れ(太左)ハイやふがんすコレ多助今おとつさんのいいしやつた事おまへめつたよそむきいしまいのふ(多助)御勿体あい何でろむさ升ふ爰よムるおつゝさんさへ得心の事あら(龜)物がたい多助の詞旦那殿のお詞といひ此ふつゝりなお榮でも女房よさへ持ッてたもれゞお榮い仕合せじやいいのふ(太左)伯父さんいろ〳〵と有り難ふムり升る(太左)ヲ、よし〳〵水入らずで何りの納りゞ早ひといふものゞレ盃の支度を仕やふとせうじの内より五八三寶お銚子盃をお六ものし昆布杯を持ち出て來り(五八)おいよ相生の松こそ目出度けれ(お六)旦那さんお目出度うムり升る(角右)ろれじやア太左衛門此所で祝言のまなびを(太左)ハイよふがんすソレ五八お六い盃を是へ(五八)畏り升て(太左)サ嫁女のお榮殿よりと是を地謳ひよ成り盃事宜敷有つて納ると此時角右衛門い苦るしき思入よて滿團の上よ居直り思入れ有つて(角右)千秋萬歳の千とこの玉のといひながらのびわゞり息さの切れるこおしみなゝ是を見て(皆々)モシと取り付くを角右衛門目をひらきて(角右)ヲ、〇とゐつこりと成る事木の頭よて〇目出度〳〵といひ乍キザミゐ付て角右衛門い落入る皆〻呼びいける事よろしくひやうし幕

○第三幕目

本舞臺正面壹間の床の間附の平舞臺上下共折廻り障子家体爰ゑ後妻おりめきせるを持懸りいるを五八も立懸りいる是をお榮お六ゝ留ている上手ゑ原丹次悴丹三郎侍の拵ゑてすゑり
いる都て鹽原内與座敷の体相方ゑて幕明く

（お榮）モシおつゑさんまアよふムひ升ゑ（かめ）イヽエモウ了管ゞ出來ません（お六）早く五八どんお詫をおしとい（ばねへ（五八）イヤ〳〵めつたゑ誤まられ〳〵後妻のおかめさんゑゝ遣ゑれねへのだ〳〵（りめ）ア、いふ憎まれ口を聞んだもの（お六）おかみさんまア〳〵ゑふムひ升ゑ（かめ）イエ〳〵退て下さい〳〵（お榮）モシ原さま早ふおつゑさまを留て下さいまし（丹次）是ゝけしゑらぬおりめどの高の知れた下男でゝムらぬゑろれを相手ゑとやゑふヲてゝ此身分ゑゑゝゑり升ふゑらまア〳〵ゑづゑゑあさい（りめ）だつてあなたあんまりだもの（五八）サアぶつならぶてどふともして貰ゑい升ふ（丹三）是ゝ五八どうまたものだ只今親共ゞせつかくこちうさいをなされてムるものを何をヲのだまづかゝまないのか（五八）いやだ原さんのあいさつが氣ゑくゑねへのだ（丹次）何とヲ身共のあいさつが氣ゑいらぬとゝ何ゞ氣ゑいらぬのだサゑれをヲせ過言をヲとぶち放すぞと刀の柄ゑ手を懸る（お六）アレ旦那こめんなさい〳〵ソレ五八さんお逃げよ〳〵とお六ゝ五八の手をとつて無理ゑ下手へ逃てと入る（お榮）おつかさんいつゑあの五八もお六も暇を出してお仕舞なさいませ（かめ）どふせながくゝ置ゑないつもりも〳〵それをあの五八めがさとつて今のやふゑ口ごたへするのだまた臺所で旦那の事や私しの事を悪く譏ッているゑもしれないゑらおまへゑつと往てやふすを考へてお出ゑ（お榮）ハイ畏り升た原様御も〳〵つくり遊びしませ○丹三郎さま待つて居て下さりませいあアトお榮ゝ下手へと入る跡ゑ三人殘り（かめ）モシ旦那（いつもあなたゑ御無理な事をお願ひ申て御非番の時てなければあなたのお顔も見られず何だゑまた此頃てゝいやゑ多助めゞゑくらしくなつて來ましたゝいナ（丹次）ゑやふゑ親子で度〳〵遊びゑ來るのゝよゑろしいゞ多助も馬鹿でおいゑら得ゑりかんずいているだろうゞ來る度ゑいやな顔もしなひでいるのが何とな來ゑくひやふで有る（かめ）何あなた多助だといつて私しの氣ゑいらなければ叩き出してもよいのですゞ分家の有るのでろふも行きませんゑらあなたいひ智恵を出して下さいましな（丹次）さゑふさとふか當家（心置なく遊びゑ參る分別が致し度ものだがト此時以前のお榮出て（お榮）モシおつゑさん（今勝手口ゑ此やふな手紙ゞ落てムんしたも〳〵何氣のふ取り上ゲて見ると分家のお作さんより多助さんの所（の色々〇あんまり馬鹿〳〵しゝ事が書て有るので持つて來升たゝいなア（りめ）ヲヤあのお作と多助とゑ本とふゑあきれたものだねへろれでゝ此手紙を太左衛門ゑ見せて多助を追ひ出すゑゝモシ旦那かふいふ都合ゑいたし升ふとおりめゝ丹次ゑ呟く所へ下手より鹽原多助出て來り（多助）旦那さん今日ゝよくゝいらつしやいました（丹次）多助殿ゑ毎度參つて厄介ゑ成り升（かめ）多介おまへ

どこへ行のだ(多介)ハイ元村迄小麥をつけて行升ふと思ひまして(うめ)うれいは苦勞だがおまへおすこし咄しが有るから(多介)ハイ何ぞ用でがんすかもないものだおまへといふものい本とふまあきれたひどい人だよ此節い分家のお作といたづらをしているのだね(多介)へイろりや何の事でがんすね(うめ)とぼけなさんなお作とくつ付ているだろふがね(多介)おつうさん誰れがろんな事をいひやしたろんな覺えいがんせん(かめ)いくらおまへが隱しても證據が有るのだ是でも嘘といふのう是をたらんよといせんの手紙を多助の前へ投付る多介い是を見て(多介)こりや分家のお作どんうらおれの所へよこ志た手紙だが私しい覺えいがんせんがあなたとうして此手紙を持つてがんすな(お榮)うの手紙いさつき私しがひろつたゆへおつかさんよ見せたのでムんすがおまへもあんまりでムんすろんあよ私しが氣よ入らねば離縁狀を書て下さんせいなア(おうめ)うふだ離縁狀を書てお榮よ渡してお呉れよ(多介)モシおつうさん是ヨりい知りません私しとお作殿とゐるさ志た覺えいがんせん又お榮も離縁狀を出す事い出來やせん(かめ)いくら知らないといつても書た物がものをいひ升是うら分家へ往ッて咄しをするうら一所わお出よ(多介)離縁狀も分家へ行事もはめんなさい〳〵(うめ)うれが出來おけりやなせあのお作といたづらをしたのだエ、不孝ものめがと持ッたる長きせるよて打ッ(多介)は免下さい〳〵(お榮)サ多介さん離縁狀を書て下さんせ(うめ)サ多介まだ書うないのう是でもう〳〵とおうめい多介をひどく打つ此時太左衛門出て此中へとつてと入りおかめを留て(太左)まア待なさい〳〵ヤイ多助ゐれまアでけへ形りをしてお袋よぶたれるやつが有るものかおかめどんどうしたわけかしんねへがまア待つてお呉んなさい(かめ)ヲヤ分家の太左衛門さんあんまり腹が立ちますからッイあらい事をしましたがいまおまへさんの所へ往ふと思つている所へあの御城内の原さまがお出おなり升たうらおろくなり升たが實い人よ咄しも出來ないやふなわけだがおまへさん所のお作さんと多助とくつ付ていますよ(太左)うれいどふいふわけて(うめ)親の目つまをしの斯ふいふ多までよこし升た是を見て下さいト件の手紙を太左衛門の前へ置くとり上ケ見て(太左)ム、成程おらアお作が多助へ送つた多だが馬鹿なまア此間まで青ッぢなたらして居たものが飛だ事だ○併シ此手紙の文でい娘が多助ふ惚れて送つたかしんねへが多助が方でいまだくつ付た共色事をしたとも文面よい證據いねへのおあら立て事を起せバ内の恥ぢだ是いゐたしよ負けてお呉んなさい(うめ)イ、エまけられませんハイお氣のどくですがよふまうせません(太左)うれでい勘辨が出來やせんうおらア娘いまだ亭主の有るものじやねへ(かめ)だつてお作さんい幸右衛門どんの悴の圓次郎が養子よ來る約束おなつているじやありませんう(太左)約束よい成つておりやすが未だ結納をとりういしたゐけでいおあし只本ンの口約束だけの事で婚禮をしたわけでいがんせんまた男の働きて一人や二人の女も出來ねへ共いわれねへうれ所じやねへ立派な亭主持の身で有り乍らわるい事をするものが世間

よいいくらも有りやす又私が手よふしぎな手紙げと入つたじやといひながら懐ろより手紙を壹通出して○何〳〵名前い丹三郎様恭るお榮より(お榮)ヱろれいと手を出して取ろうとするを(太左)手を出さなくつてもいひよかふいふまるい事をするあまが有るのだ○娘の書た此ゑも世間へ出せねへゑだから此二通共いつ所わして反古よすべい○だから預ケてくんなさい世間え知れゝば内よ疵ゲ付てお互ひよ恥ぢだと思ひ升ゲおかめさんどんなものてゲんせふな(かめ)ろれでいどふなりといひよふよして下さいまし(太左)ヤイろれい有難ひコレ多介よ去年の六月三十日ゐれへ親仁の化ぬ時よ枕元ト〳〵おれを呼で遺言を聞た事を忘れちやアだめだぞ一軒の主じゲ母親おぶたれるやつゲ有るものゥ情けねへ事い有るもんじやねへちと氣を付ケろ〳〵(多介)ハイ重〳〵濟ましねへどふぞ堪忍して下さいおつゥさんよく勘辨して下すつたありがとふゲんす(うめ)禮をいゐないて早く小麥を付てお往よ(多介)ハイ直よ是から參り升る(太左)ヲ、どつか〳〵行のか多介)元村まで小麥を付ケて行所てムひ升(太左)ム、ろふかろれなら早く行ゲいひ○おらもおいとまををやふ○旦那方へお聞づらい事をお聞せヲ升てほめん下さいましサ多介行ゥ(多介)お二人りさまほもつくりとなさいまし

と太左衛門多介い思入よて下手へと入る跡よ丹次丹三郎おかめお榮の四人殘り顔見合せ思入有つて(丹次)アびつまよりと冷や汗をかいたこりや悴あまり間抜な事をいたさあいてちと心を付い(かめ)あなた丹三郎さまのゐりいのじや有りません○お榮ゲろ〳〵つかしいから

て私しもびつくり去まゐたいくら年ゲ行かないと云つて本とふお氣ゲきかないじやないか多介の跡らないうちよ早く丹三郎さんをお寢かし申な(お榮)アイ〳〵丹三郎さん奥へ參り升うゥ(丹三)デモ只今のしぎと申て(かめ)ハテわたしゲ付ており升ゥ〳〵心おきのふあおたい奥へ(お榮)サアムんせいなアとお榮い丹三郎の手をとり奥へと入る跡よおかめ丹次殘り思入有て(かめ)アノ太左衛門ぢゝいい何ぞといふふとやかましくいつて多助のひいきをするので私しいしみ〴〵多助が憎くらしく成り升たゲいつろあおたどふかして多助を殺して下さいな(丹次)コレしづかおいひあさいと兩人邊りを見廻わして思入有るを百性圓次郎二人りの咄しを立聞しているを二人りい是をしらずよ(丹次)殺せといへバ商賣ものだからあの多助を殺しも仕よふゲ殺しゲ跡いとふする積りだ(かめ)殺してさへ下されバ跡い名主へとおしをして置ますから時ゲたつたら丹三郎さんい病身てお城内が勤まらないといふ所からお榮の養子よすれバあなたも表向わちよい〳〵お出おなるよ都合ゲよいじやムひませんか(丹次)いかさま夫れい至極の事だが何でも人の目よ立ぬ所で殺し度ものだゲ(かめ)モシいひ事が有り升今小麥を付ケて行升たからどふせ跡りい暮れ升から庚申塚邊りの藪影ていつろ一ト思ひよやッて下さいな(丹次)いかさま庚申塚といくつきやうの所是から多助ゲ歸りを待ち伏せして○併し暗夜よ馬を曳て通行いたすものまゝ有るゲうの見分ケ方よ困るての(かめ)何あなた馬の鞍ゐ攝原といふ大きな桐油が掛ッて有るからろれを目當よおやりなさい

ナ(丹次)ろれさ(聞)めつたよ仕損じる氣遣ひなし是より直よ庚申塚へと身擣へする此とたんおいせんの圓次郎と三人顔見合せ一寸思入有る事道具替りのしらせよて此道具ぶん廻す

本舞臺向ふ野面の遠見此前一面よ小松原上下よかけ稻都て沼田道小松原の体雨車よて此道具納る

雨車驛路入りの相方お成り上手より多助馬を曳き出るよ此馬の鞍お塩原と印したる雨桐油をかけ有る本舞臺の眞中よて馬とまるも(多助)へふしたのだ歩行ないかサァハイ〳〵と手綱を引ても馬動かぬも(多助氣をもみ○ヱ、青困るじやねへかサァ歩行おいかハイ〳〵こりやどうしたのだ重ひ荷い皆おおろしてから歩行けない事はあんめへ青〳〵どうしたのだサァ青歩行てくれ〳〵ハイ〳〵と手綱を引く程馬いだん〳〵跡とへよるも(へ○コレ青何てろんなよ跡トへよるのだァ、困つたものだナと多助い當惑していると上手より圓次郎御膳籠をかつぎ出て來り(圓次)ろこよいるのい多助どんじやねへか何をしているのだ(多助)ナ、圓次郎どんか今元村まで往ッた歸りだが青ど爰て急よ動かなくなつたから困つているのだ(圓次)ろりや困るだなァおれが見て呉れべると馬の手綱をとり○コレ青どうしたのだ跡へさがるのい足でもいたいのか此多助どんのお袋いやかましい人だから早く歩行て呉れ〳〵ハイ〳〵と手綱をとつて曳と馬い歩行も(へ(多助)誠よ有難ひろれていいつ所よ歸りやすべえ(圓次)ろれていおらが寄を引て行から多助どんい此荷をかついで來て呉れ(多助)ハアろうして下せへ(圓次)ろんおらそろ〳〵と行升と圓次郎い馬を曳て向ふへといると多助い御膳籠をかつぎこなし有つて向ふへといると直よ跡しらせおて此道具ぶん廻す

本舞臺眞中壹間の常足の貳重此前草土手の蹴込み此上よ自然石よ庚申塚と彫り付ありて秋草の植込み此上の方よ枝をたれたる松の大木上下共藪疊能所よ水の流れを見せ此傍よ柵み都て庚申塚の体雨車相方お成て此道具納る

向ふより圓二郎いぜんの馬を曳き出て來り(圓次)いァ〳〵大ろうくらいばんだいへといひながら本ぶたいの眞中へ來ると庚申塚の影より竹鎗お成て圓二郎の脇腹をつく是よて圓二郎苦るしみ尻居おなると馬い跡トへさがると後ロより原丹次目出し頭巾竹鎗を持ちさぐりなぐら出て圓二郎よ突當り刀を引拔きといめをさろふとすると向ふより足音するもへおいて〳〵上手へ逃てと入ると直よいせんの多助荷物をうつぎ出て來り(多助)大ろう重ひ荷物だ圓二郎どんよ追付ケねへかしらんと本ぶたいへ來て圓二郎よ突當り○ア、恟りしたろこよ寐ているい誰だへ〳〵と尋るといせんの馬い藪かげよりのそ〳〵出るをすうし見て○ヤアろこよいるい寄じやおいかなぜこんな所おいるのだと云おがら圓二郎をすかし見て○ヤアこりや圓二郎どんが切られているコレ心をしつかり持つし圓二郎どん〳〵(圓次)ヲ、多助どんかこなた怪我いおいかサおらお擣いず早ふ爰を逃て下さい〳〵(多助)コレ圓二郎どのお

らゞ事よりこなたの深手どやつゞぶつ切たェ、いま〳〵しい事をしやゞつたな(圓次)コレ此圓二郎が切られたのゝ鹽原の後家おかめ殿と原丹次ゞなせるゝさ(多助)何といゝつしやる(圓次)こなさんを殺ろふといふ彼等が工みを聞たよつてこなたの身替りよ死る覺期で書置迄殘して來たからいかならずなげいて下さるあや(多助)エ、しらなんだ〳〵日頃より母とお榮よつらく當られていゝるものゝ殺ろふといふ事さて工ゞまれたといしらなんだ〳〵コレ圓二郎殿堪忍して下さい〳〵(圓次)コレ多介どの今こなたゞ内へ歸れゞ飛て火ゝ入る夏の虫のゞれる丈いのゞれて下され多介どの(多介)能くいつて下さつた圓二郎どのいゝよもこなたのいゝんす通り此身をのゞれて命を延し天晴れ鹽原の家名を立て升ふ(圓次)ろんなら多介どの(多介)圓二郎どの(圓次)是ゞ此世の(多介)別れで有つたかホ、イとたんろくする是よて圓二郎ゝ落入る跡ゝて多介悲しきてゝし有つて泣き伏すを竹本の上るりよ成り(竹本)跡ゝい寳人りきよんぼりと月かう〳〵とさへ渡る折しも遠寺の鐘の音よあわれを爰よ秋告る心細くも見得よける(多介)今打鐘ゝ常念寺の四ッの鐘圓二郎殿の此死骸せめてゝ松の木影へろふじや〳〵(竹本)泪ながらよおい立ていだき抱へて松の影とり片付ケて手を合ゝ(多介)俗名圓二郎頓生菩提南無阿ゝだ佛〳〵(竹本)とのふる念佛も村を出る長さ別れぞ不便おり(多介)コレ青よゝれ村の人が此圓二郎どんゞ死骸を見付るまで爰よ番をして居てくんろよ○ア、われとゝなゞい馴染で有つたおァ○ゝれゝ大原村の九兵衛どんゞ南部の市から買ッて來たのをおらのとつさまよ買とられその時多介も八ッで有つたが十二の時ゝらゝれを曳き畜生ながらもゝれと兄弟も同じ事今までなつらひとつおこした事のねへ馬だ能く勤めたから段〳〵年をとるから樂をさせてやるべゑと思つていたが此多介ゝ鹽原の内よ居られねへゝれきつている通り内のお袋とアノお榮が了管違ひおやつで城内の原丹次と心を合せおらを殺すべゑといふゝるゝ工ゝ事○おらゝ是から江戸へ往ッて奉公をして金をためて歸つて來るからゝれろれまで達者でいてくれろよ(竹本)我ゞ兄弟よも別るゝ思ひ馬の前づらなでさすり〳〵男おきよて泣きいたる實意の馬よつうじてや心なき畜生さへ玉の如きの泪をたらし頭をたれて草原へこなさし入れていたりける多介ゝ見るより猶悲しく(多介)テ、ゝれ泣て呉れるか有難ひ嬉しいぞよ〳〵○いつまで斯うしていてもあきたらぬ人目よ憑らぬろの内ゝ此沼田を放れ江戸の方へ青よ是ゞ別だぞよ(竹本)心強くも行先きを前よ立たる青馬をかき退けおし退けふみ出す足ゝさながら出かねて土地の名殘りや名馬の名殘り道を別れて錦着る心つらぬく鹽原が別れてこそゝと此竹本の段切りゝ付て多介ゝ向ふへと入る馬本舞臺ゝてだん〳〵と頭を下ケる事双方見ゑ宜敷拍手幕

○第四幕目

本舞臺眞中九尺の家体下手別ね釣瓶の井戸をあつらへの所に置き上手繩暖簾臺所口を見たる摸樣爰よ五八青馬よ湯をつかつている此傍ゝ作左衛門又次郎の二人立懸りいる都て鹽原

内馬小屋前の体相方よて幕明く

(作左)五八どんていねいよ馬を洗らつて居ますの(又二)先代の角右衛門さまが大原村の九兵衛殿で五兩五粒で買いそやつた馬だらら何年立つても同じよふだ(五八)此馬の世話い多助さんがさつそやつたが夕アろら多助さんが居なくなつたので此青ゞ可愛ろふだと此時下女お六手桶を提げ出て來り(お六)アイ湯のあついのをもつて來たよ(五八)早く爰へ明けてくんべそ(作左)お六どんいつもながら男まさりでがんすのふ(お六)ヲヤ二人り連れで又五八さんを連れ出そよ來たのかへ(作左)イヤ〳〵ろうじやない爰の多助さんが見へないので見舞よ來やした(又二)あらましのとなしを聞たら多助さんを最ふ壹度呼び戻し升ふ(お六)ろふして下さんせイヤもふこちの後妻や城内の原といふ侍が親子で毎日〳〵此内へと入り込て本とふよいけませんよ(作左)サアろのはあしも村のものか寄つてしておるのじや(五八)何よしても腹の立つはなしだシイ〳〵と馬を洗らつていると此時後妻おかめ出て來り(かめ)コレおまへ達二人りい何をしているのだねへ(五八)何をしているか目で見なさい(お六馬をあらつており升(うめ)ろんな事いしないで二人り共勝手を手傳つたがよい(五八)勝手を何て手傳ひ升のだナ(かめ)けふい客さまゞ有るからさ(お六)お客といどこら來やんすな(うめ)おまへ達も知つている通り多助い爰の内の主シだのお家出をして行衛もしれずお菜と貳人りで此身代をもつて居られないから名主殿の口入で原の若旦那を養子よ貰ふのじやわいのふ(五八)何だと〳〵原さんの息子さんゞ養子よ來るとかたまげたとおしだ(お六)わたしもたまげ升たよこりやだめでゞんす(五八)まだ多助が内を出てから十日と立たないうちよ鐚をとるなんてろんな事ゞ出來るものかね(かめ)ェ、おまへ達のしつた事じやないだまつてお出よ(六五)イヤだまつちやいません〳〵と三人い爭ひいると此時原丹次出て(丹次)おうめどの何を物あらろいいたしてムるのだな(うめ)何二人りの來公人めがわたしを馬鹿よしますうらと此時馬い丹次の顔を見て恟りして後ろの庭の中へ逃げてと入ると(お六)い是を見て(五八)何だ青が原さんの顔を見てから大變おおちて逃げ込んだぜへ(お六)モシ旦那へ青ゞあおたの顔を見て直お庭へ逃げ込と升たよ(丹次)何だ身共の顔を見てアノ馬が逃げ込だと申すうム、おかめ殿與へ(うめ)でもあんまりお奉公人共(丹次)ハテムれと申よと丹次い思入よて。おうめの手をとりツイとと入る後よ五八お六い思入しう〳〵有つて(五八)此青ゞアノ丹次の顔を見て恟りして逃たのいもしや庚申塚の圓二郎を殺したのいあの丹次でい有るまいう(お六)今夜の婚禮の事や何もうも分家の太左衛門さんの所へしらして行升ふか(五八)ろんあら直よおちがしらせて來やふと二人りい身ごしらへする事道具替りのしらせよて兩人見得よろしく此道具ぶん廻す

本舞臺正面壹間の床の間物平舞臺唐紙張りの襖を立廻し上の方よ原丹次此次よ丹三郎麻上下後妻おかめ娘お榮眞中ゟ名主物右衛門居いりいる都て塩原内婚禮の体地謠よて此道具納

る

（丹次）名主殿今日いまたいろ〳〵御厄介ゐ成り盃のふムる（惣左）ィヤ〳〵今日い誠ょ御目出度ムる此惣右衛門い媒人役ょお盃のばいゥいゝたゞてムり升と名主い前ょ有る盃を持ち懸るゞ奥より太左衛門出て（太左）イヤろの盃すこし待つて下さい（惣左）ヲゝこなたい塩原の分家の太左衛門殿（丹次）誠ょ太左衛門殿どうして是へい（うめ）思ひゞけない故私しや恟りしましか（太左）こなたの恟りより私しの方ゞ恟りしましか今やふすを聞ばお榮ょ聟をとるといふ事だゞお榮ょい多助といふ亭主の有るのゐどふいふもけで聟をとりやす（かめ）あなた多助〳〵とおつしやい升があれい親を捨て出るやふなやつですうらお榮ゐ聟をとるのいゐたりまへてムり升る（太左）イゝヤろふい成りません去年六月三十日のゞんゐ死だ角右衛門殿の枕元でこなたも私しもひとつょ居て塩原の相續人い多助と極つているのだからたとへ五日や十日内を明けやふ共多介を退けるというもけょいいけません（うめ）何とおつきやつてもゞたしいあんお者い内へ入れません（太左）こなたゞ何といゞもしても祝言といへゞおらア分家だゥら知らせねへといふ法ゞあんめい○どふ有つても此盃いだめでがんすよと此時下手の襖を明けて五八先きょ百性大せい顔を出して（五八）太左衛門旦那きつゥりやつておくんなさい（作左）皆村の者ゞついておりやす（皆々）きつゥりやんぬへ〳〵（惣左）ヲな村の者爰ょ名主が付ているのだしつかょせい○ィヤ何太左衛門殿まア〳〵とおしい跡ょゐまゞして爰の所い引とつて下さい（太左）イヤ引とりません分家だゥらめつたょ引とりません又此間店で拾つたお榮と丹三郎殿のぬれ多（丹三）ヤア（太左）サ是を表向ゐすれゞ原さまのは役ょもゥゝゞるから何ょもいゞゞゐ丹次さまは親子い歸つて下さいまし（丹三）親人歸り升ふ親るいたるものゞ不承知なるょ此方ょも好みいいたさぬ何を馬鹿なサア親人歸り升ふ（五八）ヤア負けおしみいつていやアがる（作左）歸るなら歸して仕まへ（又二）太左衛門さん追ひ出しなさい（皆々）追ひ出して仕まへ〳〵（太左）ろれでい村の者もあのやふょヤて居れば早く歸つてお貰らいヤ升ふ（丹三）ェ、歸る事を土ほぜりの己れょさしずを受るものゥ○歸るみやげいうぬをゥうしてやるのだと刀を拔て太左衛門へ切り付るゞ（太左衛門恟りして下手へ逃げてと入るみな〳〵是を見て（皆々）ろりや拔た丹次親子のやつ名主もいつ所ょ敵きころせ〳〵と犬ひん棒鍬鋤をてん手ょもち出て來り平ぶたい入り亂れょ成りおうめいお榮の手をとり奥へと入る百性い大勢して丹次丹三郎を取り卷き立廻りの見得ょて此道具ぶん廻す

扨刀ょて走しり出て互ひょ顔見合わして（丹次）太左衛門（うめ）丹次さまゥ（太左）おかめう本舞臺元トの馬小屋の前へ戻りゞた〳〵ゐていせんの太左衛門おかめ走しり出ると丹次い寄りかゝる所へ百性大勢出る此時廏の中より以前の青馬荒れ出て丹次とおうめをくわへてふり廻す此きゐ乘つて百性の大勢い鋤鍬ょて丹次とおうめを敲き殺す是ょて馬いあれ廻つ

て向ふへ走しりと入る太左衛門始め百性皆々も向ふへと入ると上手より以前の丹三郎拔刀を提げお榮もいつ所ゑ走しり出て來りおうめ丹次の死骸を見て悔りして(お榮)ヤ、こりやおつうさんや(丹三)誠よ親人までが此有りさまい扱い村のやつらめ○ム、よし〳〵壹人も殘さず殺して呉れんお榮來やれ(お榮)アイと下手へ行かゝると大勢の聲よて(百性)ソレのがすな〳〵○敲き殺せ〳〵(丹三)扨い村中のやつらゞ云合せわれ〳〵をあきものゐせんといい憎いやつ此上い死もの狂るひだと刀をかまへると百性大勢出て丹三郎お榮を取り卷く事木の頭よて丹三郎い眞中よて刀をふり上ケ立身よてお榮を抱へ込む事此見得よろしく柏子幕

第五幕目

本舞臺三間の間常足の貳重正面子安地藏尊此前ゑ順彌檀左右共破れ壁べ上手障子家体下手小笹の數疊右貳重の前杉の葉菅きの家根を見せ爰におりく尼の拵らへ火を焚きいる此傍よ斧六焚火よあたりいる都て上劔男子山中庵室の体床の上るりゑて幕明く

(竹本)頃しも秋の末つゝた四方の山〳〵紅葉なす錦よまさる風情ゑり尼いてゐたよ打向ひ(かく)コレ斧六どの湯でも一ト口上ケ升ふゝ(斧六)イヤモウ澤山でごんす時ゑ妙岳どのやふまへよく善根をしてやらんそのふ(りく)イヤ別ゑ善根といふ程の事でもないゞ誰れしも此山中で泊る所ゞないと心細ひもへ一夜を明かさせてやる斗りじやいいのふ(斧六)それゞ何よりの善根じやドレ内へ歸つて噂ゑ善根をしてやり升ふ(竹本)我家へころい立歸る老母い跡を打詠め(りく)あの斧六殿も只の山ゞつとも思いれぬ人でい有る(竹本)夕ぐれ告る遠山の鐘かう〳〵とひゞきける(かく)ありやモヲ入相ドレ御明かしても上ケ升ふゝ(竹本)と佛前の御明かしかゝげひざまづき念佛の聲ぞしもせふなり折から麓の道ふみいけ杖を力らよたどり來ると此上るりゑて原丹三郎女房お榮出て來り(丹三)我々い旅の者でムるゞ此山中よて日をくらし甚だ難ぢう何卒一夜をゐとめ下さりやうならゞ添のふ存じ升る(かく)ヲ、無お困りでムり升ふまァ〳〵おと入りなされませ(丹三)左樣ムらゞ御免下され(かく)モ本のおとめ申斗りでたべ物とてもムらねばその儘休んで下さいませ(竹本)といひつゝ圍爐裏よさしよつてもへ立つ火かげよ三人いあり〳〵見合いす顔と顔(お榮)ヤアおまへい(かく)ろちいお榮か(丹三)お榮ろちや此尼御を近付さう(お榮)近か付き所じやない又旅のおかくといふぞまの灰モシ丹三郎さま爰よい居られ升ぬいいなア(丹三)すりや盤原の内へもすりよ黎つたごまの灰とか○かやふなやつを生ケ置く程諸人の難義いつゝの事よ(竹本)柄よ手をかけ立上れゞおかく頭を疊よすり付ケ(かく)サ、、るい婆〳〵もへ此所て殺して仕舞ふとのゐ詞いゐ尤でいムり升るゞ私の方事一ト通りお聞なされて下さりませ○ろこよムるお榮さんのゐ存の通り私しもよい年をしていつ迄も親子連れての旅かせぎ惡事の報ひよ悴小平い牢死をしましたもへ夫れより私しも改心してあたまを剃ッて此村へ便り升て慈悲有ある人のお世話よて此地藏堂の守りをして善根受けており升れゞむりしのおかくの姿いムり升ぬどふぞ

此あたまよめんじて堪忍して下さいませモシ是でムり升る〳〵(竹本)身のいひわけよくも
りおく泪と共よりびければ丹三郎い聞取つて(丹三)ム、敗心いたしたとあれば罪をとがむ
るよも及ぶまじ(かく)ろんなら私しめをお助け下さり升るか有難ふムり升る○併しお二人
りよい何れへのお越しあムり升る(丹三)是より江戸表へ出やふと思つて(ろく)さやふよムり
升ろ江戸へいらつしやるなら中仙道口へ出ていいけませんあなた方の人相書ゞ廻つており
升(竹本)いわれて兩人聞耳立て(丹三)何と申人相書ゞ廻つているとい(お榮)ろりやどふいふ
わけて(かく)鹽原の家よ火をつけて欠け落ちしたといふので人相書ゞまわつていますうら
當分の内いは不自由でも此庵室お隱れていたゞくよいじやムらぬか(竹本)眞實れもてよわら
わせり(丹三)ハテ人相書ゞまわつていやふとハ今日の今までしらおかつたわへ(お榮)いつろ
爰よて厄介おなり升ふわいなア(丹三)是がいわゆる地獄で佛と申やふな事で有ム(竹本)いひ
つゝてあたい胴卷より金一包取り出し(丹三)是ハ誠よ輕少だゞ米薪の價よ取て下され(ろく)
何のろのは心配おい及ひ升ぬ(竹本)折から來りゝる繼立仁介庵りの門よ歩みより(仁介)おつ
ろア内よいなさるろ(ろく)エ、此ちくせふめ腹か立て〳〵ならぬおのれも〳〵壹人りの悴
をよくも牢死をさせやゞつたな(仁介)何だ小平兄ひがとふしたといふのだ(ろく)どふもか
ふも名主へ連れて行のだ〳〵(竹本)むりひざんお門トの外○此上るりよておろくハ仁介を
花道能所まで連れ出して(仁介)コレおつろアどふしたのだ(かく)エ合點のわりおいひ鳥ゞ

かゝつているのだ耳をかしおと仁助よ呼く(仁助)ム、ろれじやア是から兄ひといつ所よ(か
く)九ッの鐘を相圖よ出て來な(仁助)合點だ(竹本)しめし合せて引返す老母ハ後を打見送り
庵りの門よ立戻り(かく)南無阿みだ佛〳〵モシあなた方御休みなされていいゝよムり升
る(丹三)しからゞざんじ眠りよ付升ふ(ろく)ドレ御案内をいたし升る(竹本)老母ゞ案内お兩
人ハ打連れ奥へ入りよける時分を違へず繼立仁助小平と共よ伺ひ出てなた奥より又旅が御
明かし吹き消し伺ひいる門よハ貳人りゞ聲をかけ(仁助)ヲイ兄ひ(小平)お袋ハいつもの所よ
寐ているか(仁助)ろふよ二人りのやつらハいつもの客間だ(小平)ム、よし〳〵かあらずどち
を組およ(仁助)合點だ(竹本)しめし合せし門の口さぐりよたつる兩人ゞ足音聞付け又旅ゞ(
かく)誰れだ小平か(仁助)おつかろふして貳人りのやつらハ(かく)今寐付た所だから仕事よ
かゝつてもいひよ(小平)ろれじやア直よふん込で(かく)どちを組ないやうおしな(小仁)大丈
夫だ(竹本)と兩人ゞ目釘をしめし忍び足なんなく奥へ入るかと見へしが(丹三)どろぼふだ
〳〵(お榮)アレイ〳〵(丹三)扨ろ山賊め(小平)ぐず〳〵いわぬへてくたゞつて仕まへト小
平仁助い刀をぬき丹三郎と切り合いして立廻りの内よお榮ハ下手へ逃げ行をおかくハお榮
をとらへる三人の見得よて山まく冠ると直よ竹本の上るりお成り(竹本)とたし合ふ木の根
かやの根ふみしめ〳〵悪者相手よ丹三郎白刃を合わす修羅の道と是おて山まく切つて落す
本舞臺向ふ壹面山又山の遠見上下共袖山を出し眞中四間半通りの大高貳重松の實木所〳〵

平ぶたい真中お切穴あり人落る仕ゥけあり爰ェ丹三郎小平仁助の三人ハ刀を抜き合わしている山おろし床の上るりよて此道具納る

(小平)仁助しつゥりしろ(仁助)合點だ(丹三)何を小しやくな(竹本)白刃をまじへ切りきつ先きよろめく仁助ゲ後ろよりまぶうゥかた先き切り下られアッといふ間もあやまたずむるかの谷間へ落てけり(小平)うぬ仁助を切りやァゲつたな(丹三)何を(小平)こひつァ大變もんだヨへ(竹本)跡くらまして逃げて行(丹三)ひきやふの曲者何國までも(竹本)猶山深く追ふて行と是ゥて小平を追ふて丹三郎ハ下手へと入ると上手よりおゥくハお榮の手をとり出て來り(ゥく)此あまめその包をこちらへ渡せ(お榮)ェ、親子が馴れ合ひでわたしらの荷物までとるのじやナ(かく)まれた事だ手めへの身ぐるみもぎとるのだ(お榮)アレイとお榮ハ逃げゥけるをおゥくハやらぬと爭ふ所へいせんの丹三郎ハ走しり出て此体を見て直ゥおかくを一ト刀切り下ると又後ろより小平ハ丹三郎の脇腹へ一ト刀つらぬくゆへおかく丹三郎ハ苦るしみゥれへ倒れるをお榮ハ是を見て(お榮)ヤ、丹三郎さまゥハ(小平)ェ、邪广しやァがるあと邊りを見て(小平)お袋もやつ付ケられたのゥェ、仕やふゲねへと丹三郎おゥくの死骸を谷間へ打込ミ(小平)まつ是で一ト片付だ○コウお榮ろんあゥふるへる事ハねへ爰へ來な○コレお榮此小平が世話で丹三郎ハ片付たから是から世間憚からず手めへと二人りがすきおくらしをしやふぢやねへゥ(お榮)ェ、ろのやふな胴よくお事しらぬヨいのふ(小平)ろんなよいヨねへでゥ、といつて小平さんの女房ゥなれ(お榮)あだいやらしい現在夫トを殺した道連れの小平何でろゥたの心ゥしたゲふものかハ いのふ(小平)イヤだといやァ仕方ゲねへ手めへもこゝでぶち殺そふか(お榮)サァそれハ(小平)ろれゲいやならゥ、といふゥ(お榮)サろれハ(小平)殺してやろふゥ(お榮)サァ(小平)サァ(二人)サァ〳〵〳〵(小平)是サお榮手めへもまん更生娘ぢやァ有るめへし間男までもして來たからだ野暮をいヨずゥ、といつてもいひじやねへゥ(お榮)そんなら今から小平さんおまへの心ゥ去たがヨふぢいな(小平)ろれじやァいよ〳〵得心して、お榮ろの替りどふぞ見捨て下さんすゥへ(小平)何で手めへを見捨るものか(お榮)ろんなら小平さん(小平)お榮ドりャろろ〳〵と○とお榮の手をとる事木の頭ゥて○出かけやふか兩人此見得ゥろしく柏子幕

○第六幕目

本舞臺真中九尺常足の貳重此前式臺を附ケ正面板羽目ゥげしゥ六尺棒提灯杯をかけ有る右貳重の上ゥ門番所と印したる膝かくしを置き上手ハ高塀下手ハ通用門の内を見せ爰ゥ門番の三九郎五左衛門の兩人貳重の上ゥすハり式臺の前ゥ三間仲人八百屋七右衛門酒屋の御用杯立懸りいる都て昌平橋内戸田家通用門の体相方ゥて幕明く

(三九)コリャろちらハ一日に幾度ゥなく御門を通行いたすゲたまゥハ何か心付を持つて來ろふなものだ(○印)ゥ致し升てあんまり出度もないゲ此頃ハひやみゥ御使が有ていけま

せん(□印)ならう事なら度〳〵と御門の通行が出來ねへとう何とういふふれ込で度〳〵と通行をいたし度ねへものだと實ハ仲間仲間で小言をいつており升(五左)ろうして八百屋ハ何ゥ心付が有るか(八白)へイ私しハ海苔を壹帖置て參り升(酒屋)私しハ是ゴ詰めて參り升たと五合樽を式臺の前へ出そと門の外より多助炭の俵を荷ひ出て來り(多助)へイ山口でムひ升が鎌田さまで此炭を持つて參り升る(三九)こりヤ〳〵鎌田さま〳〵持ちまいる事ハよいが此方への心付ゲまだ今日ハないゲいいたした(多助)とんと忘れており升た爰へ粉な炭を持つて參り升たどふりお遣ひ下さいまし(三九)ムゝろれハ添ひみなもいつ所お通れ〳〵(皆々)ヤレ現金ゴ(三九)何と申(皆々)ィヤ何共申升ぬとみお〳〵上手へと入る跡しらせおて此道具ぶん廻セ

本舞臺三間の間常足の武重向ふ唐紙張りの襖上手障子家体下手落間屋敷塀を見せいつものの所門口武重の上ゴ盥原角右衛門と札の附ケ有る具足櫃並らべ爰ゴ鎌田市作居ハりいる此傍に盥原角右衛門同女房おせいすハりいる郡て戸田家屋敷内盥原角右衛門長屋住の体相方ゴて此道具納る

(市作)盥原氏旅中のお勞れをお察し申御前へもいまだ御沙汰も致さず然るゴ御病氣との義ゴ付とりあへず見舞お參上いたしたるが御容体ハいかゞゴムるな(角右)ろの御尋ハ千萬添のゴ存る道中お て風を引込み食事さへ進まぬもへ出仕も延引仕る何卒御前よしなゴお取なしの義を願ハしふ存じ升る(せい)モシ旦那さまへいつろ鎌田さまへ道中の事を打明けてお願ひ申たらいかゞゴムり升る(角右)ハテ女の小さし出た扣へておろう(市作)アィヤ盥原氏貴殿御國元ゴ預り來られし備前盛彫の一刀殿ゴハお待兼ゴムれバろの盛彫の名刀を某受取我君へさし上升ふか(角右)サろの刀ハ(市作)得より紛失いたしてムろうがの(角右)誠ゴ貴殿の御賢察の如く大切なる盛彫の名刀ハ東海道のむまや路ゴて情なや奪われてムる(せい)夫も〳〵御前へ出仕さへも出來ませぬバ何卒お取なしの義をひと〳〵おお願ひ申升る(市作)ろの義ハいさい承知の致した最早身共ハおいとま申てムる(角右)左樣ムらバ鎌田氏(市作)盥原氏おさらバでムると市作ハて入る(角右)奥へ參ろうか(せい)サムりませいなア(竹本)打連れてころ入相の鐘ハ上野の暮れ告る人顔さへも見へもしからぬまたほのくらき屋敷内長家の軒を爰ろこと尋ね立たる炭俵ゥつぎながらゴ出來り(多助)ハイお頼み申升(甚平)どおれ誰れだ〳〵(多助)炭屋善右衛門の若ひものでムひ升ゲ鎌田さまの御新造からのお事傳てで炭を持つて參り升た(甚平)ムゝろれハ御苦勞で有つた爰の所へ入れて置て下さい(多助)へイ〳〵畏り升た(竹本)といひつゝ目ゴ付く具足の名札多助ハつく〳〵打詠め(多助)ヤゝあの名まへハ(竹本)猶もよく〳〵讀み下し(多助)モシ〳〵お中間さん向ふの具足櫃ゴ札が付て有り升かアノ名前ハこちらの旦那のお名前でムり升か(甚平)ろふさ此具足櫃ハお旦那の旅中持の具足櫃といふのだ(多助)ろふでゲんすゥモシお中間さん〳〵只今鎌田樣の御新造から爰の御新

造さま〳〵御言傳を承まつて參り升た一寸此事をおしらせ申て下さい(甚平)ハイそふかまべらく是よ扣へていろ〳〵甚平ハ奥へと入る多助ハ跡ートを見て(多助)ハイ〳〵是ハ慢りでがんす○不早く爰の御新造よお目よ懸りおたなしゲ承まり度ものだゲ(竹本)待ちまびたる一ト間より以前の妻ハ立出て(せい)鎌田の御新造よりお言傳を聞て參つた炭屋の若ひとハろなたり(多助)ハイさやふゐムり升ゐ(せい)ろふして鎌田の御言傳とハどのやふな御用を聞て來やつたぞ(多助)ハイろの言傳よりハお先き〳〵承り度ハろれよ有る具足櫃の札お塩原角右衛門と印して有るゲ此お方ハ肥前島原〳〵御國詰よなつていたお方でハムりませんか(せい)アイいかゐもお國詰よなつていた當家が臨原といふよ(多助)ろれでハ元ト阿部樣の御家來で久敷浪人して上州小川村お居て又爰の御屋敷の御家來よ相成りなさつた塩原角右衛門さまと申方でムり升るゲ(せい)いかよもお前のいふ通りろの鹽原ハこちらだゲよく御存じだね〳〵(多助)ろんあらあなたが塩原の御内室でおせいさまといひやすか(せい)アイろの通りだゲどうして委しくこちらの事をしつていやるぞいのふ(竹本)といれて多助ハ飛立つ思ひ(多助)おゝ〳〵さま(せい)エイ(多助)おなつかしうムり升る(竹本)裾おとり付き泣さいたる(せい)合點の行ぬろなたの詞私しを母といやるのハ(多助)お見忘れハ御尤私しハ八才の時お別れ申た實の子の多助でゲんす(竹本)聞くよりこなたハ打驚き(せい)エ何といやるろんならア〳〵多助か○テモ見るかげもない形りよおりやつたのふ(多助)ハイ斯ふいふ姿でお名のり申せバ定めし不思義よも思し召ふが是よハいろ〳〵のわけの有る事でがんすモシおつかさま誠よおあつかしうゲんしたなア(竹本)顔見合わしてものをもいわずなつかし涙お呉れいたる一ト間の内お内塩原ゲ始終のやふす聞とつてもし近く立ち出て(角右)こりや奥いとはしたない此有りさま町人風情よ用ハない奥へ來やれ(せい)デモあおた(角右)ハテ扨來やれといふよ(竹本)引立奥へ入おける多介ハ跡を打詠め(多介)モシ〳〵おつろさま只今是へお出ましよなつたのハ親父樣でハムり升ぬろモシどふぞ一ト言丈けなりと詞をかはして下さりませ頼み升モシ〳〵おつかさま〳〵(竹本)のび上り〳〵襖越しおろいひ入れバ角右衛門ハいきどおり(角右)だまろうこお素町人めゲかゝろめおも殿樣のお側近く勤めをいたす塩原角右衛門炭屋の下男よ知るべハ持たぬ○成程今を距る事十七ケ年以前阿部家を出て上州小川村よ八ケ年の間浪人またる詫住居其節沼田の下新田よ塩原角右衛門と申百性有つて某と同性同名のよしみを以つて乳のない所から悴の多助を育て呉れとの頼みも〳〵餘義なく引受けは是なるせいの乳をのまして八才までハ養育ゑたゲ最早八才おもなつたるも〳〵返して呉れとの頼みお仍り早速親元へ引渡したるその時よろの方が實父角右衛門より長らく悴ゲ養育を受けたる禮物として五十金呉れたれバ某ハろの金子お以て身支度調へ斯ゲ江戸表へ出て參りた當家へハ抱へ〳〵の身と相成り只今よていハ側近く三百石頂戴いたしているも下新田角右衛門殿の恩義でハないろ○汝ハその塩原の家督人たる身をもつて親の家を捨て國を立ち去る

杯といいおふよふなき不埒ものたとへ此所へ来れゞとて面會いたすやふな角右衛門と心得おるか目通りハ相成らぬきり〳〵と歸りおろふ(竹本)絆なを立ち切る一言よ多助ハ何と返答も只泣き伏ていたりける側よおせいハとり繕ひ(せい)誠よは立腹の段ハごう〳〵は尤さまで厶り升る○コレ多介おまへ心得違ひをまたのじやあいゝいかよ若氣の至りといいひ乍ら女よおぼれ金子を遣ひ果し家出をしてハ濟み升まい又お詫の出來る時節も有る程よ早く歸つたゞよいわいのふ(多介)ろの御詞ハ御尤てゞんすう是ハいいろ〳〵深ひわけが有る事なゞらいふおいわれぬわけ有つて云ひやんせぬ國を出ねゞ命よかゝる事有つてよん所おく出たものゝ今の主人山口屋善右衛門さまゞ深切よして下さるので死た氣おおつて稼ぎ金を拵らへ國へ歸つて攝原の家を立る心てがんすかならず御心配して下さり升るおお二人さま(角右)だまろふこいつゞろれ程迄よ恩義を知つているものゞ國を捨て家を捨ておせに出た恩義を辨へぬ素町人長居いたすと此襖越よ鎗玉よあげて呉れるぞ(せい)迚もおとつさまハおあいハない程よサ早う歸つたがよいわいのう(多助)ハイ歸り升る〳〵といいふものゝ十七年ぶりてお目よかゝつた御両親さまよお顔さへも合わされぬ不孝の上の悲しいお別れ(角右)名乗る身よりも名乗られぬ(せい)義理よしゞらひ恩愛の(多助)絆の切れぬ旦那さま(角右)悴でハない他人の町人(せい)かおらず達者て(多助)あなたも御無事て(角右)家の再興忘るゝおよ(多助)ハイ屹度覺ており升る(せい)うんおら多助(多助)お二人さま(角右)早く爰を立ち歸れ(竹本)盡ぬ名殘りの恩愛きづな別れてこうハ出て行と多助ハ思ひ切つて立かゝるをおせいハ多助を見送ひ角右衛門ハおせいをせいしおから空をゞき泪をかくす事三人見得よろしく柏子幕

第七幕目

本舞臺上手へ寄せて四間半常足の二重下手背おろしの板屏シ此内よ炭俵澤山積み有る此まへ半切桶の中お粉炭を入れて有る元祖とうり炭攝原多助と筆太トお書たる高張提灯を立テ爰よ多助岩田や久八差配人金兵衛炭を買いる炭買の仕出し大せい立懸りいる都て本所相生町攝原多助店掛りの体相方よて幕明く

(仕出シ○)アイ爰へいつぱい下さい(久八)畏り升た(○)ソラおもしだ(多助)有難ふムひ升(○)始めて買よ來たがべらぼふよ安いものだ(仕□)ヲイ爰へも八文が下さい(多助)有難ふムい升と炭をとかつてやる(□)どふも安いものだ(○)また買ひお來升ふ(金兵衛)有難ふムひ升と三人の仕出しハ炭を買て下手へと入る(久八)まづ是て一ト息きつけろうだ(金兵衛)私も一寸手傳ひお來て見たゞ目ゞまいろふて有つた(多助)ィヤお貳人さん御苦勞てゞんしたまア一ぷくやつて下さい(金兵衛)久八殿といひ爰の多助どんといひ大ろふな稼き人の上よしまつをするから此本所よ立派な長者が二軒出來る事ハ受合ひだ(久八)私しよりハ多助さんハ今よどつさりと金をためゞ升ふよ(多助)所ゞ中〳〵ためません金のけつぺたを叩いてかせかしよ

出して天然よたまるのゞ本とふよ金持といふのだ(久八)成程金をかせゞしてため込むとい中〳〵いひ思ひ付だ(金兵衛)成程〳〵又金をためる人の心い違ッた物だドレ一ぶくいたゞき升ふと相方成り向ふより藤野屋杢左衛門出て來り(杢右)ハイ御めんあさいまし(久八)いらつしやい炭を上ケ升かな(杢左)イヤ久どんわたしだよ杢左衛門だよ(久八)ヲヤ四ッ目の旦那かヲイ多助さん四ッ目の旦那がいらつしやつたよ(多助)ヲヤいらつしやいませ○まアいつぶくお上り下さい(杢右)ハイかまふて下さるな(金兵衛)時よ多助どん私しハモウ歸り升(多助)大きよ御苦勞でがんした(金兵)又あすのバんお手傳ひお參り升ふ金兵衛下手へと入る(杢左)時よ久八どのこなたおお頼みヤた縁談の事此方の娘でお氣に入らずバ久八殿へ娘をさし上げこなさんより多助殿の元トへ嫁入さして下さるやふよ只今有無の返事を聞取つて貰らい度ものでムる(久八)ハイまばらくお待ち下さいませと多介お向ひ○ヲイ多助さん此間からおめへゞとつきりとまた返事をまてくれねへので困るから何とか旦那へ返事をしてくんねへ(多介)ハイ此深切よ有難ふゞんすゞ此縁談ハお斷りヤ升るといふ譯ハ何を隱し升ふ私の實父といふハ神田昌平橋内戸田能登守樣の藩中で鹽原角右衛門とヤて殿さまのお側役を勤めて居り升た所殿樣がお預りの備前盛彫とかいふ刀を失なひいよ〳〵實父ハ切腹と母よりのまらせどふか此縁談ハ實の善惡のつくまでお延し下さるやふお願ひヤ升る(久八)旦那此譯だからどふ仕升ふ(杢左)イヤろふいふ事ならそのお實父の善惡のつくまでハ壹年が貳年でも待ち升ふ(多介)ろれでハ聞入れて下さり升るか(杢左)ハイ分り升たからおいとまいたし升ると三人ハ立懸る事道具替りのまらせおて此道具ぶん廻す

本舞臺正面材木を立てかけ上手橋の出しかけ是お一ッ目橋と印し有る爰お夜鷹二三人蕎麥を喰ている妓夫の玄庵雨傘を持ちかたへの石よ腰をかけいる都て本所一ッ目橋の体時の鐘相方よて此道具納る

(玄庵)ヲイ〳〵いひかげんよまねへお何だかふりろふよなつて來たから歸ろうじやねへかと捨ぜりふおて立懸りいる所へ橋の方より道連の小平朝間の千吉佃の與吉の三人出て來り(千與)サア何でもいひかられいらといつ所お來るがいひハ(小平)コレ〳〵ろんお事いひねへて嗅アゞ仕事よ出して有るから翌の朝迄待つてくんねへ(千吉)イヽヤまたれねえのだ(與吉)貳人りしてさがし當つた手めへだもの何でまつものか(千與)サア今けへして貰ふ〳〵と三人爭ッている中へ玄庵ハと入り(玄庵)まア〳〵しづかよしねへお(千吉)おめへハ玄庵兄ひ中へと入らねへで見て居てくんねへ(玄庵)まア〳〵ろんな事いわねへでゞまんをしろモシろちらの若ひのおめへもどうらくものだ中へは入ッたおいらの顔の立ッやふお何とかものをいつてやつておくんなせへ(小平)どふといつてしやふいねへゞ爰よ私ゞ持つている此刀ハ備前盛彫といつて捨賣おしても五十や六十の代呂物是を口をきいて下さるおめへさんよ預け升ふ(玄庵)ヽヽ是が銘刀かしらねへゞ買人がおけりや小刀同前どふかいひ買人ゞほし

いものだゞと此以前より藤のや杢左衛門立聞して居て此時前へ出て(杢左)イヤろのお刀私しゞ買升ふ(玄庵)ム、此刀を買といひなさるおまへさんハ(杢左)ハイ私しハ此四ッ目で藤野屋杢左衛門といふ者だがぶし付けなゞらどふか賣て下さいませ(小平)ム、ろれじやアおめへさんが此刀を(杢左)ハイどふか五十兩でお賣り下さい(玄庵)ろんなら此刀をおめへさんゑ讓り升ふと刀を渡す杢左衛門改め見て(杢左)ム、誠ゐ正銘の備前盛彫○サ五十兩どふか受取つて下さいませ(玄庵)是ハどふも夢見たやふゐとおしだ○ヲイ兄ひ早く是を賞らつて置な(小平)夫れじやアお貰らいヤて置ませふ(杢左)是で私の方も大名方へとめ込ゞいくらかの金もふけ○さやふゐらみなさんお別れ申升ると杢左衛門ハと入る(千吉)五十両といふ金をほり出して買ていたゞ御用達といふものハ中〳〵いひ腹のものだ(小平)モシ玄庵さん二人りの中へ十二両ッ、遣つて跡ハおめへさん取つて置ておくんなさい(玄庵)ヲイ〳〵ろれじやア多過るからおめへの方でいひやふゑ割つてくんねへ(小平)ろんゐ事いひねへでいひやふにおてくんなさいな(玄庵)ろれじやア爰で斯うして切るゑと件の五十兩包の封を切るのゞ木の頭ゑて○ひるくねへやつだのふとをゐ〳〵おつこりと笑ふ事双方見得宜敷拍子幕

第八幕目大詰

本舞臺通りの黒板塀此下ゑ水茶屋此前ゑ女非人のお榮目くらの拵らへ此傍ゐ非人のあら熊拵太女非人お傳の三人お榮をてうちやくしている都て本所四ッ目の休相方ゐて幕明く

(三人)ぶつおめろ〳〵(お榮)モシどふか堪忍して下さりませ〳〵(熊)イヽヤ堪忍出來ねへのだ手めへのよふな新めへゑ馬鹿ゑされた埋め合わせゑ(三人)斯うしてやるのだと三人寄てお榮の着物をとぎとり濡伴と下いまき一ッゑして三人ハと入るお榮ハろれへなき伏すと爰へ塩原多介明樽買の久八の両人出て來り(多介)ヲイ久八さんいつも出合ふ所ハいひ合ひおたやふだねへ(久八)本とふゑ向ふのお辰婆さんもおまへとおいらの休むのが店の揚りゐしているやふだ(多介)何ゐしても一ぶくして行升ふ○ハイおゞアさん今日ハ(お辰)ヲヤ多介さんゑ久八さんいらつしやいサ一ぶくお上りなさいと此時多介ハ思ひすお榮の顔を見て恟りして(多介)ヤアろちハ(お辰)ヲヤ炭屋さんハろの乞食を(多介)何目の見へぬのゑ此形りとハ氣の毒なひけだ(久八)多介さんそろ〳〵歸ろうじやねへか(多介)おまへ一ト足先きへ歸つて下さい(久八)それじやア先きへ歸るゑと久八ハ向ふへお辰ハ下手へと入る多助邊りを見て(多助)コレ目くらイヤお榮てなたハどうしてこんなゑ落ぶれだのだ(お榮)エ何とおつしやり升る(多助)十壹年後沼田で別れた塩原多助だ(お榮)エ多助さんり面目ない〳〵とお榮ハ逃げやふとするをゑ多助とらへて異見をする爰へ藤野屋杢左衛門出て來りて十兩の金をお榮ゑ與へ多助ハ四ッ谷津の守坂へ百五十兩の金子を所持して藤野屋の使ひに行杢左衛門ハ宅へ歸る跡はお榮壹人り殘り爰へ道連の小平出て來りお榮ハ偽せ目くらゆへ目を明き多助を殺ろふといふ仕組ゑて此道具ぶん廻す

本舞臺向ふ土手の遠見所〳〵松の立木都て本郷仙臺堀櫻の馬場を見たる体入相の鐘相方よて此道具納る

(多助)エヽ折角持ッていたのよ先方てい分らぬ答へ早く蹄ッて藤のやの旦那よ能く聞直して行升ふと本ぶたい真中へ來ると道連の小平出て(小平)ヲイ多助一寸待ちね〳〵(多助)ハイどなたでムひ升(小平)誰でもね〳〵道連の小平だ手め〳〵の持ている其金をおいらよかしてくんね〳〵(多助)どふいたし升て此金い人さまの預り物(小平)イヤとぬかしやア腕尽てもとつて見せうか(多助)サアそれい(小平)サア〳〵エヽめんどふだ(多助)ヤアどろ棒だ〳〵と逃げ廻るを小平い懐刀を抜き多助下よ押へ付け馬乗りよ成ると後ろより以前のお榮出て(お榮)小平さん〳〵(小平)お榮ゥ加勢しろ(お榮)アイとお榮も懐刀を抜きその儘小平の脇腹へ突き通す小平苦しみ(小平)うぬおれを切りやアがつたな(お榮)大悪人の道連小平多助さんふかわつて殺すのじやとあぐるもへ小平ハバつたり尻居よなる多助も是を見て(多助)ヤアわりやお榮ろんなら此小平を(お榮)モシ多助さん改心をした此お榮是でうたがい晴らして下さんせいなアと此時上手より鹽原角右門中間甚平提灯を持ち出て來り(角右)夫れよいるい多助でいないか(多助)ムヽおとつさまか(角右)シテ是成る女い(多助)その女が常〳〵咄しを申升たお榮と申ものよムり升る(角右)ムヽこやつゲ人非人のアノお榮めとか(お榮)エヽ面目ないそふじやと自害をして身の言譯をする所へ藤の屋奎左衛門い備前盛彫の刀を持ち來り角右衛門へ渡し多助と娘お花と祝言の約束を調へ角右衛門い紛失の盛彫を手よ入れ再び家の榮へを見る多助いお花と祝言の上大商人と相成る目出度狂言の局を結び宜敷拍子幕

明治廿五年八月
仝　年八月　廿日印刷
　　廿日出版

定價金六錢五厘

著作者　佐橋富三郎
麹町區飯田町六丁目
廿五番地

印刷兼發行者　保坂芳兵衛
東京市本所區南二葉町
十二番地

賣捌所　大石新造
東京市日本橋區濱町二丁目
十七番地

廿五年七月廿八日蛎殼町勝島印刷